

論文

台湾におけるナショナル・アイデンティティ  
——日本統治下における「台湾」の萌芽——

National Identity in Taiwan: How “Taiwan” Emerged under Japanese Occupation

渡邊 絢夏 (Ayaka WATANABE)

筑波大学人文社会科学部 博士後期課程

中華民国は複雑なアイデンティティの形成を経ながら現在の「台湾」へと収斂していった。その背景には、有史以来の外来政権による支配や、蒋介石率いる国民党軍政期以来の社会的背景などが大きく関与している。台湾は長らく no man's land の状態であった。オランダ統治を契機に、以降様々な外来政権によって統治されることとなった台湾は、帝国日本の統治によって初めて「台湾」を意識することとなった。台湾は長らく複数のエスニック・グループが共存していた。エスニック・グループ同士で一つのネイションとして意識を共有することはなく、また一つのグループが明確に島の支配者として独立することもなく、棲み分けられていた。それは清朝統治時代においても同様であり、あくまでも部分的な統治に留まっていた。「日本」というネイションに統合されることで、台湾に住む人々が共に「日本人」化させられた。しかしながら、明らかな内地人と外地人の差別・差異に、外地人たちは自らを他者化することとなり、「われわれ」を意識することとなった。この「われわれ」は日本人とは異なるナショナル・アイデンティティを有するものであり、「台湾」創出の萌芽であった。

本研究では台湾のナショナル・アイデンティティの萌芽を日本統治期に見るものである。方法として日本人作家の川合三良と台湾人作家の呂赫若の文学作品をテキストとして取り上げ、内地人が外地台湾をどのようにまなざしていたか、外地人たちが日本帝国の家族国家観による統治をどのように受容していたかの2点を文学作品から分析する。さらに日本人という支配者が存在したことで、原住民族と漢族グループの境界に揺らぎが生じたことで、現代に繋がる「台湾」としてのナショナル・アイデンティティの萌芽が日本統治時代に現れていたことを明らかにする。

The Republic of China converged to contemporary “Taiwan” through the formation of a complex identity. The facts that foreign governments ruled Taiwan since the dawn of history and that a certain social setting emerged through the KMT (Kuomintang) led by Chiang Kai-shek have greatly been involved in this context. Taiwan was a no man's land for a long period of time. After being ruled by the Netherlands, Taiwan was governed by various foreign administrations and as a result of Japan's governance, Taiwan became conscious of “Taiwan” for the first time. Several ethnic groups were coexisting in Taiwan for a long time. Those ethnic groups did not share the consciousness of being one nation and the groups were divided among themselves without one group being the clear governor of the island. This situation did not change in the Qing Dynasty; thus Taiwan was only governed partially. Getting integrated into Japan, the people living in Taiwan were made Japanese. However, due to the distinction by the Japanese people between people from in- and outside of Japan and discrimination of people from outside of Japan, the Taiwanese became aware of “themselves”. These people had a different national identity than Japanese people, which then functioned as a foundation for the creation of Taiwan.

This study examines the emergence of Taiwan's national identity under Japanese occupation. For the analysis, literary works by Japanese author Kawai and Taiwanese author Lu Yu Hua were used to see how Japanese people viewed Taiwanese people as well as how the Taiwanese accepted the governance by the Japanese empire. This study reveals that through Taiwan's governance by the Japanese as well as through the fluctuation of boundaries between indigenous Taiwanese and Han Chinese the foundation leading to national identity in present-day Taiwan grew under Japanese occupation.

キーワード：ナショナル・アイデンティティ、台湾、日本統治期、呂赫若、川合三良

Keywords : National Identity, Taiwan, Japanese Occupation, Herou-Lu, Saburo Kawai

はじめに

昨今、ナショナル・アイデンティティは台湾をめぐる大きな問題となっている。現在中華民国(以下、台湾<sup>1)</sup>)には、正式に承認されている16の原住民族<sup>2)</sup>に加え、日本の統治以前から台湾に住む本省人<sup>3)</sup>、蒋介石率いる国民党軍とともに移民した外省人、また原住民族や日本人、漢族との混血など、数々の立場にある人々が混在している。このような背景には有史以来オランダや清朝、日本などのいくつかの外来政権による統治を受けてきた事実がある。複雑な歴史的背景から台湾は民族や言語、文学などの様々な要素によって重層性のある歴史を築いてきた。その成り立ちは言うなれば年輪のようなものであり、歴史や文化、民族など台湾には多くの境界領域が存在する。それぞれの領域は切り離すこともできないが、完全に同化することもできない。台湾のナショナル・アイデンティティを論じるには、複合的なアイデンティティの構成を理解しなければならない。すなわち、政治、歴史、宗教といった文化的アイデンティティと、対中華人民共和国(以下、中国)や国際的な立ち位置を意識した政治的アイデンティティである。

また、台湾と称されるとき、それは純粹に土地そのものを指す場合、南京に首都を置いていた【中華民国】からの流れを汲む歴史の一端を指す場合、中国とは異なるナショナル・アイデンティティを持つものとして主張する場合など、様々な意味を包括する。台湾の人々を含まない【中華民国】と、現在の正式な「国名」として使用される中華民国は、ナショナル・アイデンティティを異にする。つまり中華民国という語が示すものは時代と立場によって異なるのである。そのため、「台湾・台湾人」とは何者か、という問いに対しては時代を区分して考察する必要があるだろう。本研究では日本統治時代に現在の台湾の源流ともなるナショナル・アイデンティティの芽生えがあったことを論じる。

台湾のナショナル・アイデンティティを巡る研究は、若林正文『台湾：変容し躊躇するアイデンティティ』や、山崎直也『戦後台湾教育とナショナル・アイデンティティ』、黄俊傑『台湾意識と台湾文化—台湾におけるアイデンティティの歴史の変遷』など、多く著されている<sup>4)</sup>。それらの研究は、一領域に留まるだけでなく、歴史、教育、政治、文学といった多角的な視点から行われてきた。また先の諸研究は日本統治時代から現代に至るまで時代も幅広く扱われている。しかしながら、山崎(2009)の著作の一例を挙げるが、教育という視点を得ながらも、そのアプローチには日本での学習指導要領にあたる過程標準や教育政策法規などの公的資料などから探り、政治との近接性が強い。これには「一つの中国」論以来、台湾化と換言される本土化の流れといった、政治的諸問題が台湾アイデンティティに密接に関わっているという背景がある。本研究では、従来の研究に多くみられる政治的なナショナル・アイデンティティへの接近を試みるものではなく、文学作品をテキストとして問題を再構成するねらいである。また、台湾人作家の呂赫若と、日本人作家の川合三良の両名の文学作品を取り上げ、テキストの中からナショナル・アイデンティティがどのように表出しているのかを探る。そして、現

<sup>1</sup> 本論においてそれぞれの国の名称に関しては、現在の中華民国を指すときは台湾と称し、中華人民共和国を指すときには中国と称する。なお、時代区分に際して、その名称が指すものが同意とならない場合は【中華民国】のように括弧付きで示し、適宜詳説することとする。

<sup>2</sup> 日本語において「原住民族」は差別的なニュアンスを含むため、「先住民」という語が使われるのが一般的であるが、台湾では1994年の憲法改正に伴い、国民党統治時代の「山地同胞」に代わり、原住民族自身が「原住民族」と呼称を改めた。その後1997年からは「YUAN ZHU MIN ZU原住民族」を使用している。よって、本稿では日本語で使用される「先住民」と同義で「原住民族」と表記する。

<sup>3</sup> 現在でも単に別の省から移り住む人々を外省人、対して元からの客家系、閩南系などの住人を本省人と称する。本稿では1945年以前から台湾に住んでいた人々を本省人、国民党軍と共に台湾に渡ってきた人々を外省人と定義する。

<sup>4</sup> 他にも若林正文『台湾抗日運動史研究』や、石井由理「音楽文化を通してみたナショナル・アイデンティティ—台湾の二世代比較」、本田周爾「台湾におけるナショナル・アイデンティティの諸相」、吳豪人「遅れてきたナショナル・アイデンティティ(二) 完—台湾法史に関する一つの覚書き—」など枚挙にいとまがない。

代に繋がる台湾意識の萌芽が日本統治時代に見られたことを明らかにしたい。

## 1. 台湾ナショナル・アイデンティティ

台湾のナショナル・アイデンティティを論ずるにはいくつかの工程を経なければならない。すなわち、ナショナル・アイデンティティとは何かという問い、そしてさらに台湾をナショナルと定義可能なかという問いを明らかにすることである。特に前者はその前提となるネイションをどのように考えるかという段階を踏まなければならない。その語の定義については未だ定まらず、論者によって異なる様態を表すため、慎重を期す必要がある。

一つ目のナショナル・アイデンティティの定義を見てみる。ネイションは国家、国民、民族など文脈に応じてその翻訳が異なる。そのため前提として、ナショナル・アイデンティティの概念を「構成主体」と「制度的枠組み」に分けて考える必要があると中谷猛（2000）は指摘する。ナショナル・アイデンティティという概念が「『集団的アイデンティティ』の次元の一つとして取り扱う必要がある」と前置きし、ナショナルという概念自体も「構成主体としての『国民』『民族』と制度的枠組みとしての『国家』」に二分され、かつ内容規定に曖昧さが付随する」と述べる<sup>5</sup>。つまり、前者を一つの集団に帰属する一あるいは帰属しようとしている人々とするなら、後者は国家そのもの、ステイトを指すのである。

また川上勉（2003）はナショナル・アイデンティティを「国家のレベルでは自国の存立基盤や国家としての統一性を追求することを目指すものであり、個々の国民にとっては国家への帰属意識（アイデンティフィケーション）を確認する行為であり、またその容態である<sup>6</sup>」と説明する。

さらにナショナリズムの研究者であるアントニー・D・スミス（1998）は「ネイションをあらゆる政治的努力の目標とし、ナショナル・アイデンティティをすべての人間的価値の基準とする教義<sup>7</sup>」と述べる。

このように各論者の定義を概観しても、語の含む概念は広く、かつ抽象的である。ゆえに各論者のナショナル・アイデンティティの定義に対する整理は、中谷（2000）を参照することとする。

- a. 社会における差異化を承認する国家の政策としてのナショナル・アイデンティティ。
- b. 多文化社会・多文化主義（多言語主義を含む）を原則として掲げるナショナル・アイデンティティ。
- c. 他者（性）を意識した帰属意識または一体感としてのナショナル・アイデンティティ。
- d. 多文化社会を前提にした国民統合の手段としてのナショナル・アイデンティティ。
- e. マイノリティ集団・エスニック集団の政治的・社会的・文化運動としてのナショナル・アイデンティティ。<sup>8</sup>

以上の分類は、決して一国の中で一つに留まるものではないだろうし、また部分集合的に重なることも十分に考えられる。これらの分類は相互関連的な要素から成り立っており、なおも複雑な様相を呈する。

台湾がこれらの分類のどこに位置するかは非常に難しい問題である。後述する台湾における光復70周年パレードスピーチや「人間の鎖」の例から見ると、対大陸を意識して行った人間の鎖に対してはeに分類すると言えるし、馬英九のスピーチはcを目指したものであったとも考えられる。そして中

<sup>5</sup> 中谷猛「『ナショナル・アイデンティティ』の概念に関する問題整理」『立命館法學 2000年3・4号（271・272号）下巻』（立命館大学法学会、2000）、p.679。

<sup>6</sup> 川上勉「第4章 ナショナル・アイデンティティの2つの側面—動員と参加—」『ナショナル・アイデンティティ論の現在—現代世界を読み解くために—』（晃洋書房、2003）、p.73。

<sup>7</sup> アントニー・D・スミス、高柳訳『ナショナリズムの生命力』（晶文社、1998）、p.45。

<sup>8</sup> 中谷猛「『ナショナル・アイデンティティ』の概念に関する問題整理」『立命館法學 2000年3・4号（271・272号）下巻』（立命館大学法学会、2000）、p.707。

国の示す少数民族56民族の中に含まれる「高山族<sup>9</sup>」の言説はdに分類される中国側のナショナル・アイデンティティである。

このようにナショナル・アイデンティティを巡る問題は重層的な要素を持ち、かつ台湾自体が歴史や政治、教育に複雑な重層性が見られることから分類が容易ではない。しかし全てに共通するのはナショナル・アイデンティティとは「われわれは何者か」という問いを發するということである。

繰り返しになるが、台湾は様々な外来政権によって統治されてきた歴史が存在する。統治者や政権が変われば教育も変化する。教育の変化は歴史観の変化と同意として語ることができる。それは昨今の例で見れば、台湾の歴史教科書『認識台湾』の問題に端的に表れている。アイデンティティ形成に教育が大きく影響することは論を俟たないが、台湾の「われわれは何者か」という問題に対しては、時代を区分して考察する必要があるだろう。

二つ目の問題は次の通りである。台湾においてナショナル・アイデンティティという語を使うことは、台湾を国＝ネーションと認めるべきかという一種の政治的問題が付随する。周知の通り台湾は国際社会において正式に国家と承認されていない。本多周爾(2003)はアントニー・D・スミスの論を参考に、ネーションを「一つの国家に住まう国民、ならびに自らの国家の建設を志向する人々の共同体、すなわち自らのアイデンティティを持ち、自立の道を探求する中で、民族から国民へと転化する過程を選択する人々<sup>10</sup>」と説明している。つまり、国際政治上、国家と規定されておらずとも、ナショナル・アイデンティティは持ち得るものであるのだ。

台湾には国旗や国歌が存在する。国旗や国家は「ナショナルなもの」の表象であり、このような観点からもナショナル・アイデンティティが台湾には存在していると考えられる。台湾における国旗は「青天白日滿地紅旗」を指す。これは元をたどれば、南京に拠点置いていた国民党軍が党旗と定めたものであった。加えて、現在の台湾のパスポートの表記も「中華民国」の文字が見られる。それでは台湾＝中華民国と同定して良いのか。結論から述べると、南京に首都を置いていた【中華民国】は、現在のパスポートに表象される「中華民国」とは同一のものではない。現在の「中華民国」は、島へと逃れた【中華民国】とそこに住んでいた本省人や原住民族たちの歴史や文化と融合し、形成されていったものである。南京事件の歴史は台湾と中国の一部に包括される歴史と言える。孫文は一度も台湾の地を踏んだことが無くとも台湾建国の父と呼ばれる。厳密には【中華民国】人の孫文が台湾の礎にあることから、完全な分離でも融合でもない状態で台湾の人々の中に複合的に【中華民国】は含有されているのである。

また日本統治時代、台湾に住んでいた本省人たちは便宜上「日本人」であった。抗日戦争という語においても同様のアイロニーに晒される。中国において抗日戦争が指すのは日中戦争である。抗日戦争の中で行われた連合軍の台北大空襲や新竹空襲には、国民党軍も含まれる。【中華民国】が台湾に対して空襲を行ったことに対して、両者を同一のものとみなしてしまえば陥穽に嵌ってしまいかねない。

日本統治下の台湾で行われた抗日闘争は前期と後期に大別することができる。1915年の西来庵事件までを前期と区切り、それら漢族を中心とした抗日運動は武装闘争であった。一方、後期の抗日闘争は1920年代から始まる。特に台湾文化協会、台湾民衆党の人々によって盛り上がりを見せた台湾議会設置請願運動、新文化運動はそれまでの武装蜂起とは大きく異なり、政治運動、文化運動、社会運動の形態をとった<sup>11</sup>。さらに付け加えるならば、原住民族たちによる抗日事件は、変化の潮流を逆行するような、武装蜂起の「霧社事件」が第一に挙げられる。

このように一口に「抗日」と言っても、それを指すものは集団や時代ごとに大きく異なり、同一ではない。台湾に住む人々は、日本統治の中で自治に対する様々な形態での運動を起こしたものの、日

<sup>9</sup> 外来政権の統治以前から台湾に住む原住民族を総括して中国政府は高山族と称しているが、現在台湾政府は台湾島内に住む原住民族を16民族に分類している。

<sup>10</sup> 本多周爾「台湾におけるナショナル・アイデンティティの諸相」『武蔵野女子大学現代社会学部紀要(4)、89-101』(武蔵野女子大学現代社会学部紀要編集委員会、2003)、p.91。

<sup>11</sup> 若林正文『台湾抗日運動史研究』(研文出版、1983)、pp.6-8。

本の引き揚げ後、迎えた国民党の教育によって、再びねじれと重層性を帯びた歴史の中に投入されることとなる。ナショナル・アイデンティティは普遍的なものではなく、時代によって変容するものである。台湾の人々は様々な外来政権によって支配され、近代化の中で「日本人」や「中華民国人」として生きざるを得ず、やがて「台湾人」としてのナショナル・アイデンティティを選び取っていった。

現在の台湾に住む人々がどのような自己認識を得ているのか、それは台湾政治大学選挙研究中心が行った世論調査<sup>12</sup>において、如実に表れている。台湾の人々の自己認識は「台湾人」「台湾人であるし、中国人でもある」との回答を合わせると9割を超える。この結果から鑑みると、現代の台湾に住む大多数の人々が自分たちを「台湾人」と認識しているということが明らかである。実際に、台湾の人々に「你是哪國人？（あなたは何人ですか？）」と問えば、必ず「我是台灣人。（私は台湾人です。）」と返ってくる。台湾で中国語を学ぶ外国人向けの教科書のどこにも「中華民国人」の文字は無いのである<sup>13</sup>。中華民国人ではなく「台湾人」と答えることから、台湾にはナショナル・アイデンティティの存在が明白である。

そして台湾には『四大族群<sup>14</sup>』が住んでいる。人口比で言えば明らかに少数派の原住民族を含んで「『四大』」というのは、この言い方が台湾社会における文化的多様性の相互尊重をうたう、台湾住民のナショナル・アイデンティティについての理念を下敷きにしている(傍点ママ)<sup>15</sup>からである。つまり、若林(2001)が「多重族群社会」とあらわしたように、台湾は多民族の集合体である。

川上(2003)は、ナショナル・アイデンティティには「参加と動員」の両面が存在すると指摘し、「3つの機能<sup>16</sup>」から、特に三つ目の「同胞愛の実現」に関して、動員と参加のアイデンティティの側面から以下のように触れている。

パレードや追悼式典などは「文化的紐帯と政治的類縁性を思い出させる」だけではなく、現実には人々を文化的、政治的行事へと動員することである。すなわち、国家のアイデンティティは、人々を吸引し、組織しようとする。したがってそれは、「動員のアイデンティティ」という特徴を持つ。一方個人の側は、パレードや記念式典などに参加し、それにナショナルなアイデンティティを体感する。それは参加することによって感情移入することであり、「参加のアイデンティティ」と呼ぶこともできよう。国旗や国歌は憲法によって制定されるという動員的な側面を持つと同時に、実際にそれを目にした耳にして、人々がそこに「ナショナルなもの」を感じる時にはじめて国旗や国歌として成立する。したがって、ナショナル・アイデンティティとは、「動員のアイデンティティ」と「参加のアイデンティティ」の2つの側面が結合されたときにはじめて生成するということができる。<sup>17</sup>

これに次いで川上(2003)は、ナショナリズムはこの動員のアイデンティティに比重が傾いたときに発現する現象であると述べ、スミス(1991)が著書の中で、ナショナリズムとナショナル・アイデンティティの概念を厳密に区別出来ていないのは、双方の比重を区別しなかったからであると指摘す

<sup>12</sup> 「臺灣民眾臺灣人/中國人認同趨勢分佈(1992年6月～2016年12月)」<http://esc.nccu.edu.tw/app/news.php?Sn=166#> (2018年7月5日閲覧)

<sup>13</sup> 国立臺灣師範大學國語教學中心で作成、使用されている『當代中文課程1課本』においても「他是不是臺灣人？(彼は台湾人ですか?)」「是、他是臺灣人。(はい、台湾人です。)」という例文がある。

<sup>14</sup> 四大族群とは、①原住民族、②福佬人(閩南人)、③客家、④外省人(漢族、モンゴル族、回族、満州族なども含む)の四つのグループを指す。(若林正文『台湾:変容し躊躇するアイデンティティ』(薩摩書房、2001)、pp.30-31。)

<sup>15</sup> 同上、p.31。

<sup>16</sup> 川上はスミスの「3つの機能」である「個人的忘却(personal oblivion)」、「集団的尊厳の回復」、「同胞愛の実現」をそれぞれ、「(1)子孫を通じて忘却をのりこえること、(2)黄金時代への訴えかけを通じて集団的尊厳を回復すること、(3)共同体の、いま生きているものと死者や戦没者とを結びつける、象徴、儀式、式典を通じて同胞愛を実現すること」と端的に要約している。

<sup>17</sup> 川上勉「第4章 ナショナル・アイデンティティの2つの側面—動員と参加—」『ナショナル・アイデンティティ論の現在—現代世界を読み解くために—』(晃洋書房、2003)、p.73。

る<sup>18</sup>。

台湾のナショナル・アイデンティティを論じるにあたって、川上の論に依拠したとき、台湾では「文化的、政治的行事」が行われ、それに個人たちが参加しているかについて考察しなければならないだろう。参加・動員のアイデンティティとして挙げられるのは、2004年に行われた「人間の鎖」が良い例である。人間の鎖は政治的な抗議や要求を伝える、一種のデモ行為である。台湾だけではなく、ソビエト連邦からの独立を望んだバルト三国や、スペインからの独立を望んだカタルーニャ、また、嘉手納基地への反対運動として沖縄県でも行われている。

台湾で行われた人間の鎖は、当時の台湾総統であった李登輝の呼びかけのもとで『台湾のために祈る集い』と銘打って開催され、(中略)『人間の鎖』で台湾西部の北から南まで200万人が手を繋ぎ、中国の台湾に向けたミサイル配備に抗議した<sup>19</sup>ものである。総統の企画した「政治的行事」に台湾の一角にもものぼる人数が集まったことは、特筆すべきことであろう。

また他の例を見てみる。台湾で行われる軍事演習と言えば「漢光演習」が有名である。特に、戦後70周年に当たる2015年に行われた「漢光三十一號」では、例年の軍事訓練に加え、「抗戦勝利兼台湾光復70周年(正式には抗戦勝利暨臺灣光復70週年<sup>20</sup>)」を記念した軍事パレードが行われた。この演習に際して、国防部はFacebook上で200名の一般見学者を募った<sup>21</sup>。ここに川上の述べる動員と参加のアイデンティティが働いていると言える。しかしながら同時に、これは非常に限定されたものであると言わざるを得ないだろう。

さらに、当時の台湾総統であった馬英九は、「パレードでの演説で日中戦争当時の国民党軍の戦いぶりを振り返り、『血と涙の歴史は忘れてはならない』<sup>22</sup>」と述べた。これには日中戦争において日本軍と戦ったのは国民党軍であり、国民党党首としての自負からの発言であろうことが推察できる。しかし、「戦争当時の台湾人は日本人として戦った経緯があり、中国での経験を出発点とする国民党の歴史観に共感しない人も多い<sup>23</sup>」と語られるように、台湾の人々の反応は様々であった。翌月14日付の同社朝刊では、中国河南省出身の志願兵だった老人が中国の国歌である「義勇軍進行曲」に対して並々ならぬ思い入れを語っている。その一方、同記事の中で、台北市の大学院生である林有容氏は「抗戦と言ったって中国の話。台湾とは何の関係もない。(中略)祖父は抗日戦争を戦ったこともない。(馬政権は)誰の話をしているのかと思う<sup>24</sup>」とインタビューに答えており、その温度差は激しい。

ここに外省人と本省人という二項対立は描きやすいが、それでは陥穽に陥りかねない。ここには、外省人・本省人という要素以外にも、実際に日中戦争を戦った世代と経験していない世代というジェネレーションの要素も存在するだろう。「新台湾人」意識を超えた新たな意識である「もう一つの台湾人意識<sup>25</sup>」の誕生が特に若い世代に芽生えていることを考えれば、「抗戦勝利兼台湾光復70周年」パレードの限定的な公開のみを見て、参加のアイデンティティに行きついていないと結論付けるのは時期尚早だろう。これをさらに立証するには世代間の意識の異同を観察しなければならないが、本論では台湾のナショナル・アイデンティティの萌芽を明らかにすることが目的であることからして、これ以上の言及は控えることとする。

<sup>18</sup> 川上勉「第4章 ナショナル・アイデンティティの2つの側面—動員と参加—」『ナショナル・アイデンティティ論の現在—現代世界を読み解くために—』(晃洋書房、2003)、pp.67-75。

<sup>19</sup> 週刊朝日「迫る、台湾総統選! それでも国民党・馬英九が敗北する『現実味』」2008年3月28日刊行

<sup>20</sup> 中華民国国防部HP 軍事新聞「國軍7月4日湖口『國防戰力展示』弘揚抗戰精神」2015年4月15日付(2017年5月24日閲覧)

<sup>21</sup> 台湾国防部公式アカウント「國防部發言人」(2018年7月13日閲覧)

[https://www.facebook.com/pg/MilitarySpokesman/photos/?tab=album&album\\_id=933763033353682](https://www.facebook.com/pg/MilitarySpokesman/photos/?tab=album&album_id=933763033353682)

<sup>22</sup> 朝日新聞「台湾、日本への対応苦心 中国意識、大規模軍事パレード」2015年7月5日付朝刊

<sup>23</sup> 同上。

<sup>24</sup> 朝日新聞「抗日戦70年、割れる台湾」2015年8月14日付朝刊

<sup>25</sup> 李登輝が提唱した「新台湾人意識」を引き継いで、政治や独立か統一かといった議論をとりあえず置いたまま、現時点の自分たちの経済活動などのみを注視する新たな若い世代のこと。(川原絵梨奈「『新台湾人』の議論と政治意識をめぐって」『アジア社会文化研究(10)』(アジア社会文化研究会、2009)、p.108。)

## 2. 「台湾」の萌芽と民族意識

オランダによって初の外来政権を迎えた台湾は、以来数々の外来政権によって被統治者としての道を歩む。17世紀から約400年に渡って複雑な形成を遂げたため、台湾、台湾人、台湾文学などの語に対する定義付けは曖昧な部分が多い。

オランダが最初の外来政権として台湾に38年間君臨した後は、鄭一族の占領、清朝の統治、日本への割譲と相次いで政権が交代し、台湾領内は混乱を極めた。清朝が1683～1895年までの約2世紀に渡って台湾統治に乗り出した結果、大量の漢族移民が流入し、平地に住む原住民族との混血化が進んだ。この原住民族たちを平埔族といい、混血化していくことで原住民族たちの文化は急速に漢族化していった。また一方で、山地に住む高山族と呼ばれる原住民族たちとの対立は深まり、清朝の統治は部分的なものに留まったとされる。

1895年の日清戦争終結の後に締結された下関条約によって台湾が清朝から割譲されると、日本は台湾の統治のために同化政策による言語教育を推し進めた。日本語教育が円熟期を迎えると、日本語読書市場が育ち、日本語で書かれた文学作品が次々と出版されるようになる。日本語文学作品の中には「外地」の表記が往々にして見られる。それは大日本帝国の勢力圏が本州、いわゆる「内地」からの広がりを見せたからである。台湾の割譲を筆頭に、1905年のポーツマス条約では南樺太の割譲が行われた。さらに1910年の日韓併合条約による朝鮮の併合、1922年のヴェルサイユ条約締結による南洋群島の委任統治を行い、大日本帝国は次々に東アジア諸国を主権下に置いた。また支配は及んでいるが学術上 colony (= 植民地) とは呼べない租借地である関東州や満州、上海租界、フィリピン・ベトナム・ラオス等の南方諸地域をも勢力下へと置いた。

これらの事実から統治を行った台湾、南樺太、朝鮮、南洋諸島と、当時勢力下であった関東州やフィリピン等を一括して「外地」と称することが多い。黒川創 (1996) は『「外地」とは、第二次世界大戦敗戦にいたるまで、日本国家が「本土」の外に出て領土拡大をはかった諸国・地域をさしている<sup>26)</sup>』と定義する。木村一信 (2014) は黒川の考えに、より辞書的な定義を加え、次のように定義するのが一般的であると述べる。

- (1) 国外の地。
- (2) もと、日本固有の領土を内地といたったのに対して、それ以外の領有地、すなわち「朝鮮」・台湾・「樺太」などの総称。
- (3) 日本人社会が形成されていた所、すなわち、ハワイや南米、南洋群島などの移民たちの住んでいた場所、さらに、旧満州や上海の日本人租界地、アジア太平洋戦争下に軍政のおこなわれていた地域などを指す場合。<sup>27)</sup>

しかしながら、「外地日本語文学」と語を用いた場合、その「外地」の定義は狭義のものとなる。木村 (2014) は「外地と日本語文学とを一つの用語として組み合わせた場合、狭義の外地なる語は台湾、『朝鮮』、旧満州、『樺太』、また、南洋諸島といった地域に限定される<sup>28)</sup>』とした。本論で述べる「日本語文学」もこの定義に準じる。

オランダ統治期と鄭氏政権時代には、宣教教育や科挙教育などの文化政策が試みられたが、統治期間が短かったため、台湾住民のアイデンティティ形成に大きな影響を与えることはなかったと考えられる。

清朝統治期になると、漢族移民の原住民族女性との通婚により台湾での混血化が進み、大陸の科挙集団の流入が台湾の儒教化の進展と土着化を促した。しかしながら、台湾が日本に割譲された時期に

<sup>26)</sup> 黒川創編『〈外地〉の日本語文学選 南方・南洋/台湾』(新宿書房、1996)、p.5。

<sup>27)</sup> 木村一信『「外地」日本語文学への射程』(双文社出版、2014)、p.6。

<sup>28)</sup> 同上、同頁。

においても「台湾民主国」を建国しようとしたものの、達成されるほどの「台湾」住民の全島に及ぶ団結は叶わず、部分的な運動に留まった。このことから清朝統治期においても、確固たるナショナル・アイデンティティの形成は行われなかった。

日本統治期には台湾住民を日本人とする同化政策やその後の皇民化運動による日本語教育が成功し、日本語読書市場の拡大や「内地<sup>29)</sup>」への留学による各分野の専門家の輩出に繋がった。日本からの統治の解放による期待は、その後の国民党の外省人に対する優遇と本省人に対する不遇といった国民党の失政ゆえに本省人と外省人の不和を生み「2・28事件」へと発展する。反国民党、反外省人という意識の高まりは、「中華民国」としてのアイデンティティ形成ではなく、本土化と呼ばれる「台湾」化へのアイデンティティの形成に決定的な影響を与えたものと考えられる。またその後のアルバニア決議による中華民国の国連脱退によって「中華人民共和国」籍への強制変更を危惧した一部の台湾人が沖縄で日本人に帰化している。以上のような歴史的背景から、台湾の文化は民族や言語、文学などの様々な要素によって重層性のある歴史や文化を築いてきた。ゆえに、台湾の歴史や文化、民族など多くの境界領域が存在する。

台湾のナショナル・アイデンティティにはネイションとエスニック・グループの問題が大きく影響している。時代によって台湾意識はその内実を変化させてきており、日本統治時代には「被支配者」としての共通意識が漢族グループと原住民グループの境界を揺らがせてきた。また、日本の統治が長くなるに連れ、内地を知らない台湾生まれの日本人—湾生が誕生する。「内地人—外地人」という対立勢力に「湾生」が加わることで、エスニックとネイションの関係がどのようになっていったのか一考する必要がある。そのため、本節では第一に、日本人作家の川合三良の作品から湾生が内地をどのようにまなざしていたかについて考察する。そしてその後に台湾作家の呂赫若の作品から台湾が日本の統治をどのように受容していたのかについて読み解く。

#### (1) 日本人作家・川合三良『轉校』『或る時期』と民族意識

日本統治期の台湾では、同化政策を推し進め、統治の終盤には皇民化政策も行ったことからナショナル・アイデンティティを日本と同一化させる動きを見せていたと言える。その動きの中には内地人と外地人の子どもの共学化や「国語常用家庭」の推進、「内台共婚法」の制定など、学校教育や家庭教育、また政治などの各側面からのアプローチが存在した。しかしながら、統治開始から特に最初の20年に集中して、同化の動きに対抗した人々がいた。その一つに霧社事件がある。霧社事件の後、1931年6月に全国大衆党は国会で台湾総督府の対応を批判し、その背景には原住民族に対する侮蔑や差別が見られると指摘した。当時台湾で書かれた日本語文学作品ではこのような内台共婚法や霧社事件などの社会情勢を反映させた作品が多く描かれている。特に、差別や侮蔑が表れている作品の一つに川合三良<sup>30)</sup>の作品『轉校』がある。

『轉校』の初出は1941年5月発刊の『文藝台湾』である。本作に触れる前に、雑誌『文藝台湾』の立ち位置を述べておきたい。『文藝台湾』は西川満が私財を投じて1940年の1月に創刊された雑誌である。「『文芸台湾』はその後も、『華麗島』の残滓を長く引き摺るが、『台湾文学』派の批判の対象となったのは、こうした『華麗島』以来の異国趣味に基づく芸術至上主義的傾向であろう<sup>31)</sup>」と考察さ

<sup>29)</sup> 台湾や南樺太だけではなく、租借地である関東州や満洲などを一括して「外地」と呼ぶのに対して、日本本州を「内地」と呼んだ。

<sup>30)</sup> 川合の略歴に関しては、川合の長男である高田良助氏に直接聞き取り調査をしている松尾教史(2009)の「台湾時代における川合三良の文学作品:ある在内地人作家にとっての皇民化政策」が詳しい。川合三良(1907-1970年)は大阪に生まれ、幼少期を台湾で過ごす。父の川合良男は、領台直後から政商として台湾と内地を往来していた。幼少期は台湾に住んでいたとされるが、台湾で小学校に通っていた記録はなく、その幼少期は未だ謎が多い。明確な記録があるのは日本に帰国してからである。岡山県立第二中学校、第六高等学校を卒業した。その後京都帝国大学国文科を卒業すると、1935年に渡台。創作活動は1938-1941年までの三年間と短い、1940年32歳の時に文芸台湾賞を受賞している。

<sup>31)</sup> 垂水千恵「日本時代の台湾文壇と大政翼賛運動に関する一考察」『横浜国立大学留学生センター紀要(2)、102-110』(横浜国立大学、1995)、p.108。

れるように、台湾詩人協会の機関誌『美麗島』を引き継ぐ形で創刊された。『文藝台湾』は西川のスタンスに大きく依拠し、また1941年9月発刊の2巻6号からは皇民化運動に協力的な立場を取りながら作品が発表されるようになっていった<sup>32</sup>。それゆえ反発も大きく<sup>33</sup>、中山侑らは張文環を中心として1941年5月に『台湾文学』を創刊した。『文藝台湾』と『台湾文学』の違いはクリーマン（2007）が以下のように述べている。

『文芸台湾』は「純」文学の牙城として、専らロマンティックな詩、小説、芸術、民話を扱っていた。一方『台湾文学』は、農民や虐げられた人々の生活の厳しい現実を反映した、リアリスティックな表現を標榜した。<sup>34</sup>

ロマンチズムの『文藝台湾』とリアリズムの『台湾文学』という対立は同氏いわく、誇張されたものであるという。実際には、リアリズムは『台湾文学』のみにあつたわけではなく、浜田隼雄の『南方移民村<sup>35</sup>』や、西川の『台湾縦貫鉄道<sup>36</sup>』などにも見られた<sup>37</sup>。また、『文芸台湾』の芸術至上主義も『台湾文学』に対抗して後に方向転換していく。

そんな『文芸台湾』に方向転換の兆しが見え始めるのは、1941年9月発行の2巻6号からである。この号は志願兵をテーマとした小説、周金波の「志願兵」、川合三良の「出生」のほか、戦争誌特集を組むなど戦時色を強く打ち出した編集となっている。<sup>38</sup>

このようにロマンチズムとリアリズムの対立は『台湾文学』が創刊される前までのことであるとも言えよう。垂水（1995）によれば、このような単純化された対立は「大政翼賛運動の一環である『地方文化の振興』の方針」が『台湾文学』派たちの独立の大義名分として利用された結果である<sup>39</sup>。そんな中でも川合の作品は、西川や中山たちとの立ち位置が異なるものであると言って差し支えないだろう。川合三良の先行研究は極めて少ない。管見の限りでは先ほど引用した通り、垂水（1995）は「戦時色を強く打ち出した」作品として触れた程度であり、研究としては唐瓊瑜（1997）<sup>40</sup>が周金波との「二世」比較として取り上げたもの、そして松尾教史（2009）<sup>41</sup>と中島利郎（2012）<sup>42</sup>がそれぞれ一本ずつ論

<sup>32</sup> 同上、pp.108-109。

<sup>33</sup> 西川の評価に関して、クリーマンは1980年代の郷土文学運動の中での張良澤と陳映真を取り上げている。西川の台湾への愛着を「台湾意識」を形成する上での肯定的な貢献と捉える張に対して、現地文化への愛着を純粋な異国趣味として一蹴する陳という対立論争を「郷土主義と民族主義の衝突」だと指摘する。（同上、pp.112-114。）

<sup>34</sup> フェイ・阮・クリーマン 著・林ゆう子 訳『大日本帝国のクレオール（植民地期台湾の日本語文学）』（慶應義塾大学出版会、2007）、pp.109-110。

<sup>35</sup> 台湾東部の日本人移民の厳しい生活を記録した長編小説。クリーマンは『南方移民村』にリアリティが見られると述べたが、「濱田はリアリズムの立場に立って『南方移民村』を書いたが、国策を反映して移民たちの生き方を書き損ねている」と考察する研究もある。（黄振原「浜田隼雄『南方移民村』論」『論究日本文学』（63）、22-32』（立命館大学日本文学会、1996）、p.32。）

<sup>36</sup> 西川の唯一の歴史小説。島を横断する鉄道建設の隠喩的記述を通して1895年以降の台湾の歴史を凝縮したもの。

<sup>37</sup> フェイ・阮・クリーマン 著・林ゆう子 訳『大日本帝国のクレオール（植民地期台湾の日本語文学）』（慶應義塾大学出版会、2007）、p.110。

<sup>38</sup> 垂水千恵「日本時代の台湾文壇と大政翼賛運動に関する一考察」『横浜国立大学留学生センター紀要（2）、102-110』（横浜国立大学、1995）、pp.108-109。

<sup>39</sup> 同上、p.109。

<sup>40</sup> 唐瓊瑜「『二世』から見る、戦前における台湾文学」『第21回国際日本文学研究会会議録（21）、55-68』（国文学研究資料館、1998）

<sup>41</sup> 松尾教史「台湾時代における川合三良の文学作品：ある在内地人作家にとっての皇民化政策」『Core ethics（5）、305-314』（立命館大学、2009）

<sup>42</sup> 中島利郎「日本統治期台湾文学研究：台湾における川合三良—静謐なる抵抗—」『岐阜聖徳学園大学紀要 外国語学部編（51）、61-84』（淑徳大学、2012）

じているものしかない。

台湾におけるナショナル・アイデンティティを語るうえで、台湾の人々がどのように内地をまなざしていたのかという視点は不可欠である。それと同時に、後に故郷と呼ぶべき場を失うこととなる湾生たちの、内地への視座を読み解くことも「台湾」を浮き上がらせるためにも必要と考える。そのため、本稿では川合三良の『轉校』とその続きとなる『或る時期』を分析する。

『轉校』では、大正初期に台湾から内地の小学校へと転校をした少年、竹田洋一が湾生を理由に「生蕃」と呼ばれ、内地の子どもたちに馴染めない様子が描かれている。

洋一は、父の故郷であるこの町の小学校へ変つて来ると、すぐ生蕃といふ渾名をつけられた。たゞ台湾から転校して来たと言ふ理由からである。まだ大正も初期の、ことに田舎の小学校では、台湾から転校して来ると言ふのは何か非常に物珍しい事に違ひなかつた。そして台湾といへば、すぐに生蕃が連想されるのであった。中にはまるで異国人だとしても思っているのか、彼の頭の先から足の先まで念入りに見廻す生徒もあつた。<sup>43</sup>

物語の設定が領台から20年程度しか経っていないことや、田舎という土地柄を理由に洋一は「生蕃」と揶揄される。また、「異国人だとしても思っているのか」という一文からは、台湾が一般の人々にとって未知であることを示し、そこから来た洋一に対して未開の地から来たような異国人に対する奇異を読み取ることができる。さらに本文中では鮭とたくあん、梅干しが入った弁当を食べている洋一を見て、「生蕃のくせに、わし等と同じものを食つとるぞ<sup>44</sup>」と殊さらに囁き立てる同級生の姿や、誰かが放屁したと同時に火鉢の前にやってきたことで「生蕃が来たと思ふたら、臭い臭い。あゝくさいくさい<sup>45</sup>」と洋一をからかう少年たちの姿が描かれている。「生蕃」が「わしら」日本人と同じものを食べていることへのからかいには、外地人を一括して見下すような侮蔑意識が読み取れるだろう。また一方で、洋一といじめっ子が喧嘩をし、それを咎める教師が生徒たちに以下のように説く場面がある。

生蕃とは何か。皆はまだ地理や歴史を教はらないから、或はよく知らないからも分からないが、生蕃も立派な日本人です。台湾で生れたからと云つて、竹田は皆と同じ様に内地人です。<sup>46</sup>

この教師の言葉は一見して台湾に対する理解が示されているように見える。しかしながら、その実は異なる。台湾の原住民族たちを日本人と言いつつ、湾生の洋一を内地人と評する教師の言葉からは「内地人」と「外地人」を異なるエスニック・グループであると分類している。これが意識されているものか、無意識のものかは判然としないが、ネーションを「日本」としながらも異なるエスニック・グループに属する相手とし、明らかな差異・差別があったことが示唆されている。当時日本側の視座にはネーションを同一と規定しながらも、エスニック・グループに優劣をつける思想が根底にあったと言える。

また、洋一の血統は日本であるにも関わらず、子どもたちは彼を「生蕃」と揶揄する。これには「台湾人」という民族集団に対する差別よりも「台湾」という土地そのものに対する差別意識が存在したと言えるだろう。このことから、ネーション、エスニック・グループの二者構造に、台湾という土地に住む者—マイノリティ集団としてのアイデンティティの三要素を加味して語られねばなるまいと考える。すなわち、「内地人（日本人）—外地人（台湾人）」という対立は、あくまでも台湾内において語られる文脈であり、内地と外地という対立を描いたとき外地には在住の日本人と台湾人が同列で括弧付けられる。それゆえ、ナショナル・アイデンティティは「外地」と「内地」では異なるものであ

<sup>43</sup> 川合三良「轉校」『日本統治期台湾文学 日本人作家作品集 第五巻』（緑蔭書房、1998）、pp.433-434。尚、引用文は仮名遣いはそのままとし、旧漢字は新漢字に置き換えた。

<sup>44</sup> 同上、p.433。

<sup>45</sup> 同上、p.435。

<sup>46</sup> 同上、p.436。

ったと考えられる。

また次いで、主人公洋一の大学生時代を描いた作品である『或る時期』も見ていく。『或る時期』は『轉校』に続いて、1941年7月に発刊された『文藝台湾』第2巻第4号初出の自伝的短編小説である。大学生になった洋一は「精神的に受けた打撃」を癒すため、台湾へと気晴らしに行く。「あるひっかかりのために、卒業近くなつて停学処分にあひ<sup>47)</sup>」、卒業が一年延びたという主人公の事情に関しては、筆者の川合自身が京都大学在学中に反戦活動を行っていたことから、それに依拠したものだと考えられる。

主人公の台湾育ちの従姉妹、妙子は外地人の中に括られる日本人であった。

妙子は台湾育ちのため、皮膚の色が土色であることを気にしながら、ある程度のおしやれの技巧と媚態とを心得て、自分の容貌に対しては、ひそかに相当の自信を抱いてゐた。映画と音楽とが好きで、一週間の中、決つた日々に洋裁と生花との稽古通ひ、台湾特有の東京語を使用し、内地殊に東京といふ言葉に漠然とした憧れを持つてゐた。そして、人種の卑見に基くらしいある種の気位の高さを保持してゐた、と附加へれば、台湾の中流以上の家庭の娘によく見かけられる、ごく平凡なタイプの一例であった。<sup>48)</sup>

「台湾特有の東京語」が言語学でピジン言語<sup>49)</sup>にあたるものか、または「東京語」と使われるような方言のようなものなのかについては史料の制限から考察するには足りない。しかしながら、ここからは当時の台湾がある種独自の言語文化を形成し始めていたことが読み取れる。このような言語状況からも、湾生の間には東京に対する憧れと同時に内地人とはまた異なる意識が誕生していたようにも思われる。

『轉校』に描かれるネイションとエスニックの重複は内地に転校した主人公の視点から考察した。続編に当たる『或る時期』では、内地に行ったことのない、湾生の少女についても描かれている。湾生の少女、妙子は内地、特に東京に対する漠然とした憧れを抱いている。これは、内地が外地に比べて文化的に進んでいる、都会への憧れを反映していると見て相違ないだろう。それに対して、「人種の卑見に基く」気位の高さも持ち合わせていることから、「日本-台湾」という対立構造への劣等感と同時に、台湾島内における「日本人」という人種的な優位性を見出していることがわかる。このようなことから、日本人と台湾人、湾生の出生的立場、そして内地か外地かという身体の地理的立場によってナショナル・アイデンティティが異なってくるだろう。

以上の旨を図示したものが図1である。図1の左図は従来考えられてきたような、内地人から外地人に対する優位性を示すものである。内地日本ではネイションとエスニックが共に「日本」であり一致する。しかしながら、外地台湾の方ではエスニックは漢族もしくは原住民族であるのに対し、ネイションは日本となり、ねじれた状態にある。当然一つのネイションに対し複数のエスニックを有する国は存在する。しかし、この当時ネイションの意識がなかった台湾の人々にとって、強引にネイションに組み込まれたことによって、そのアイデンティティ形成は難解なものとなるのである。日本統治の後期にはこのエスニックがネイションとしての形成を遂げ始め、国民党統治時代になると省籍の対立から「台湾」としてのネイションを確固たるものへ変化させていく。

また内地人から外地人へと延びている矢印は優位差・差別意識を表している。つまり左図は従来通りの「支配者-被支配者」の二項対立構造である。

右図はエスニックやネイションの形態は同様だが、外地台湾には「台湾人」だけでなく、日本とい

<sup>47)</sup> 川合三良「或る時期」『日本統治期台湾文学 日本人作家作品集 第五巻』（緑蔭書房、1998）、pp.443-444。

<sup>48)</sup> 同上、p.455。

<sup>49)</sup> 複数の言語の単純化された混成語を指す。一時的な言語であったものもあれば、パプアニューギニアの公用語となっているトクピジンなど、その後クレオール化し制度化されたものもある。（日本語教育学会編；水谷修〔ほか〕編集『新版 日本語教育事典』（大修館書店、2005）、p.507、p.540。）

う視座も存在する。『轉校』の中で描かれているのは「内地」日本人から「外地」日本人への差別である。ここには既述したように、内地から「外地」という土地そのものに対する差別意識が存在するのである。ゆえに土地そのものへの矢印とともに、台湾の中で日本人から台湾人への矢印のように二項対立に留まらない対立意識が『轉校』の中から読み取ることができる。

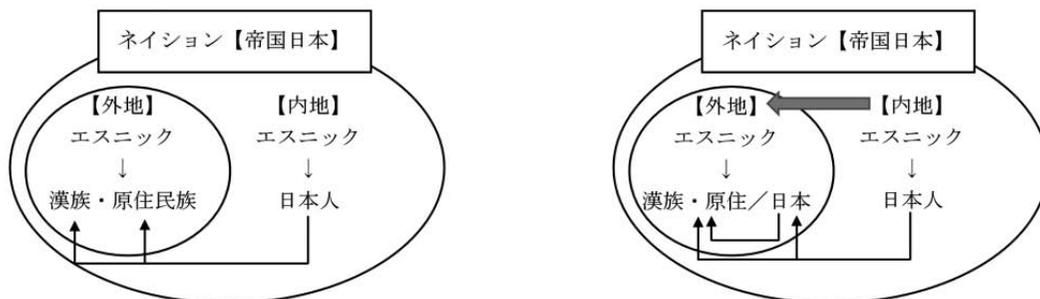


図1：『轉校』におけるネイションとエスニックによる対立構造（筆者作成）

## (2) 台湾人作家・呂赫若『隣居』と家族国家観のメタファー

小熊英二（1995）によれば、大日本帝国は「実態において多民族帝国であり、そのままで単一民族神話を許さなかった<sup>50</sup>」。優生学的な思想は西欧が発祥であるが、その思想が当時の日本においても人々の意識下だけでなく、ネイションの意識下に存在したことは先述した通りである。優生学は往々にして血統主義、純血主義に換言される。

本来純血主義は、異なる民族の受け入れを拒否するものである。それは近代史上の多く事例からも明らかであり、純血論は人種主義<sup>51</sup>の立場に立ちやすくなる。また同氏が「教育その他に多額の予算を要し原住民の反発も大きい同化政策がコスト的にデメリットであることが明白になっており、英仏などほとんどの植民地宗主国は同化政策を放棄していた<sup>52</sup>」と述べるように、同一の民族に同化させるのではなく、異なる民族として排除する動きが世界の潮流であった。この世界の潮流から考えると、大日本帝国の同化政策は時代に逆行したものであった。「内台共婚法」によって内地人と外地人の婚姻にどの程度影響を与えたかは考察の余地を残すものの、このような法制化は大日本帝国が民族の「混血化」を忌避していないことの証左に他ならない。

しかしこの点のみを挙げて日本の血統主義の薄さを示すことはできない。混合民族論は、『日本人』の血統意識を放棄したのではなく、帝国の実情にあわせてそれを拡張した<sup>53</sup>イデオロギーである。そのことから「太古から様々な異民族を統治・同化した経験に富む民族<sup>54</sup>」であるため血が混ざっていくことによって、「日本人」化していく外地への同化政策が、差別の解消であるという建前を生み出した。ゆえに、「内台共婚法」を始めとする同化政策は、混血化による差別意識の解消という建前に隠された、ネイションへの帰属意識を日本へと切り替えるものであり、台湾の数多あるエスニック・グループを解消させ、「日本」へと統合するものであったと言えよう。さらに日本が自民族の純血を放棄し、同化政策の受け入れが比較的容易であった背景には日本の「家制度」が関係していると考えられる。小熊（1995）は以下のように指摘する。

決定論的に家制度が社会を規定しているかどうかはともかく、少なくとも家族国家論というか

<sup>50</sup> 小熊英二『単一民族神話の起源 〈日本人〉の自画像の系譜』（新曜社、1995）、p.370。

<sup>51</sup> 社会学において、人種主義は「マイノリティに政治的美容同や市民権は与えられない」ものである。とされ、同化主義は「マイノリティに政治的平等は与えるが、文化的にも同化が求められ、すべてのエスニック集団の解消をめざす」ものであると区別されている。（同上、P.365。）

<sup>52</sup> 同上、pp.372-373。

<sup>53</sup> 同上、p.372。

<sup>54</sup> 同上、p.364。

たちで論じられる同化政策論に、家族制度が反映していないはずがない。喜田貞吉や亙理章三郎をはじめ、朝鮮・台湾の家族国家における位置を「養子」と表現することは、当時きわめて広範だった。そして日本の家制度で育った人間にとって、養子は出自を忘れ名を変え、養家の家風に同化するの当然のつとめである。逆に日系移民がホスト国に同化するさいには、自分たちは養子であるというアイデンティティがとられたことが知られている。<sup>55</sup>

上述のように養子になることで「血統上の祖先とはべつに、制度としての祖先は天皇になる<sup>56</sup>」のである。特に皇民化政策の名の下に、帝国臣民へと切り替えていく動きは、台湾や朝鮮、その他の外地を養子であると規定することで日本というイエに積極的に組み込むものであったと言える。このような「家族国家観」を根底に据えた同化政策は台湾側にどのように受容されていたのだろうか。

天皇を父とし、国民をその子であるとする家族国家観の思想は、帝国日本において植民地を統治するうえで大義名分を日本に与えた。八紘一宇<sup>57</sup>のスローガンは台湾にも広く流布され、皇民化の基本原理として統治者側に都合よく作用した。横路啓子（2013）は「日本帝国の版図に組み込まれた時点ですでに皇民であるはずなのに、皇民となるためにより強い努力を求められるという矛盾、それは大東亜共栄圏という虚偽の共同体での台湾の人々の位置を宙吊りにするものであった<sup>58</sup>」と指摘する。さらに同氏は八紘一宇の家族国家観における血縁の概念は、台湾の人々にとって受け入れがたいものであったと考察している。その背景には日本の家族制度と、中国や台湾、朝鮮の父系血統に基づいた家族制度との違いが考えられる。

小熊英二（1995）は「中国や朝鮮などでは、父系の血統を示す『姓』は、一生変わらず」、さらに「同姓不婚・異姓不養の原則」があると述べる。それゆえ「朝鮮などでは『姓』を変えることはおよそ考えられ」ず、「創始改名への反発は大きかった」のである。しかしながら、日本においては、婚姻によって男女問わず「名字とよばれる『氏』は、簡単に変わってしまう」ものである。つまり、「姓」は父系血統の名称であるのに対し、「氏」はイエの名称であり、父系血統とは直結するものではない<sup>59</sup>。

日本において父系血統を重視しない事実は、戦国時代には立花宗茂<sup>60</sup>や小早川隆景<sup>61</sup>などの例を見ても明らかである。江戸時代に至っては、入り婿による家督相続は武家のみならず、商家にも裾野を広げる。人形浄瑠璃の代表的な演目である「曽根崎心中」の徳兵衛の例などもまさにその通りであろう。このようなことから鑑みれば、父系血統を重視する中国や朝鮮が、イエを重視する日本の家族観と馴染まなかっただろうことは理解できる。

台湾では漢族グループが多いことから、父系血統が重視されることは明白である。台湾の統治が成功した背景にはその統治期間の長さも一因とされる。横路（2013）は「戦争期の台湾文学では、確か

<sup>55</sup> 小熊英二『単一民族神話の起源〈日本人〉の自画像の系譜』（新曜社、1995）、p.380。

<sup>56</sup> 同上、p.381。

<sup>57</sup> 『日本書紀』巻第三にある神武天皇の「橿原遷都の令」中の「六合を兼ねて以て都を開き、八紘を掩ひて宇と為んこと、亦可からざらんや」より引用された言葉。1940年の第二次近衛内閣の「基本国策要綱」（1940年8月1日）によって「皇国の国是」に格上げされ、アジア共同体の理念として大東亜共栄圏が提唱されるようになった。

<sup>58</sup> 横路啓子『抵抗のメタファー 植民地台湾戦争期の文学』（東洋思想研究所、2013）、p.40。

<sup>59</sup> 小熊英二『単一民族神話の起源：〈日本人〉の自画像の系譜』（新曜社、1995）、pp.377-378。

<sup>60</sup> 立花宗茂（1567-1643）：陸奥棚倉藩主、筑後柳河藩の初代藩主。豊後・国東郡寛（大分県豊後高田市）に吉弘鎮理（のちの高橋紹運）の長男として生まれる。1581年に男児の無かった立花道雪に養子として迎えらる。このとき、宗茂は実質的に立花家の家督を継いでいた道雪の娘・閨千代と結婚して婿養子となり、家督を譲られたが子に恵まれず、実弟直次の子・忠茂を養嗣子として迎えた。

<sup>61</sup> 小早川隆景（1533-1597）：毛利元就の三男として誕生。竹原小早川家の当主・小早川興景が後嗣の無い状態で死去したため、1543年に当主として立った。また、小早川の本家である沼田小早川家においても、当主・小早川繁平を隠居・出家に追い込み、繁平の妹を娶ることで家督を継ぎ、沼田・竹原の両小早川家を統合した。しかしながら子に恵まれず、木下家定の五男で豊臣秀吉の養子であった羽柴秀俊（のちの小早川秀秋）を養子として迎え、家督を譲った。

に共通したメタファーが見られる」として、「日本帝国が掲げた家族国家日本、大東亜共栄圏という大きな物語のもと、台湾島内で生まれた文学」がその言説を擬態し、メタファーを用いたり、抵抗したりしていたと指摘する<sup>62</sup>。言語政策や教育機関の設置といった制度の整備を整えることによって、日本語世代の台頭が日本語読書市場の発展を支えることとなった。台湾人作家たちの日本語の円熟期を迎えるほどの統治期間がなければ、このように「台湾島内で生まれた文学」が家族国家観に対して抵抗も恭順も、あるいはそれらを超越した言説も見られることはなかったであろう。

日本が台湾を統治する中で、日本人作家と台湾人作家が共通して重要視した歴史人物は鄭成功であると横路(2013)は指摘する。日本では台湾統治を始めるよりも以前、1715年に近松門左衛門の「国性爺合戦<sup>63</sup>」が人気を博したことからも、鄭成功の名は周知されていた。日本の統治の正統性を巡る言説の一つには、鄭成功の母が日本人であったことで、台湾と日本を結ぶ英雄がいたのだとするものがある。このような構図を描くことで、「台湾知識人の中の、家族国家日本の言説に基づいた皇民化を否定する言説<sup>64</sup>」に対する「一種の反駁」として鄭成功の「混血」性は台湾を養子とする八紘一宇を掲げる帝国側に都合よく利用されていた。

しかしながら養子をめぐるとこの言説を冷静な目で捉えていた作家も存在する。それが呂赫若<sup>65</sup>である。以下では呂の『隣居』から養子としての台湾を論述してゆく。

『隣居』は1942年に雑誌『台湾公論』第82号に発表された呂赫若の短編小説である<sup>66</sup>。呂はこの作品を発表した同年の5月に2年間の内地日本留学から台湾に戻っている。その年の10月に発表されたことを考えると日本での経験を経て、台湾に帰国した後に書かれた作品だろう。その日本語力は『隣居』を読めば明らかである。語彙力と文章力についてはクリーマン(2007)が次のように述べている。

呂赫若(1914～51年)は、最も巧みかつ円熟した戦前の郷土文学作家である。呂には楊逵の社会的使命と張文環の現地的リアリズムを網羅しつつ、洗練された、高度に個人的な文学を生み出す力があった。(中略)呂の作品は一貫して構成に優れ、権威ある声で語られ、微妙な陰影をつけた登場人物であふれ、彼らの中に作者の真の共感が表されていた。<sup>67</sup>

呂は日本語教育を受けて育った世代である。それゆえ、呂の作品は日本人作家と比べても決して遜色ない域に到達していたと言えよう。ここでクリーマンが述べているように呂の書く作品の登場人物が「微妙な陰影をつけ」られた人物であるということは『隣居』にも通ずるところがある。その上で『隣居』の語り手である陳先生を始め、台湾人の李夫妻の中に「作者の真の共感が表されている」ことを前提として、読み解く。

小説は日本人の田中夫妻が台湾の田舎に引っ越してきて、隣人の李夫妻の子、健民(民雄、民坊)を連れて行ってしまふまでの約8か月間の交流を描いている。国民学校の教師である台湾人の「陳先

<sup>62</sup> 横路啓子『抵抗のメタファー 植民地台湾戦争期の文学』(東洋思想研究所、2013)、p.14。

<sup>63</sup> 主人公鄭成功は和藤内と称される。和藤内とは和(日本)でも藤(唐つまり中国)でも内(無い)という言葉遊びからつけられた名前である。穿った見方をするならば、台湾に渡った鄭成功を指して、日本でも中国でもなく「台湾」としての人間と読むこともできるだろうが、当時において日本が「台湾」を一つの国として明確に意識することもなかったと考える方が自然である。そのため、和藤内は単純に日本人でも中国人でもないハーフの子という程度の意味しか内包されていないものだろうと考える。

<sup>64</sup> 横路啓子『抵抗のメタファー 植民地台湾戦争期の文学』(東洋思想研究所、2013)、p.49。

<sup>65</sup> 呂赫若(ろかくじゃく、Lǚ Hèruǒ・1914-1950?年):日本植民地下の台湾中部に生まれる。台湾総督府台中師範学校を卒業後、1935年日本の左翼系文学雑誌『文学評論』に掲載される。その後台湾の文芸雑誌『台湾文芸』『台湾新文学』などで日本語文学作品を発表。戦後は中文に切り替えて創作活動を続けるが、1947年の2・28事件以来、中国共産党支持者として政治運動に身を投じ、その後1950年前後に謎の失踪を遂げている。

<sup>66</sup> 本文引用は中島利郎編『呂赫若:日本統治期台湾文学台湾人作家作品集 第二巻』(緑陰書房、1999)より行う。

<sup>67</sup> フェイ・阮・クリーマン著・林ゆう子訳『大日本帝国のクレオール(植民地期台湾の日本語文学)』(慶應義塾大学出版会、2007)、p.206。

生」を語り手として物語は展開される。田中夫妻が引っ越してきた陳先生たちの住んでいる場所は、内地人が住むような環境でない「市外れといつても特にごみごみした界限<sup>68</sup>」である。陳先生は、そのような場所に内地人がいるのが意外であり、驚きであったと独白することからも、当時の台湾の田舎町においては特に明確に内地人と日本人の住み分けがはっきりしていた社会背景を反映しているものと考えられる。そのような猥雑な田舎街ながら、陳先生が「唯一の二階建て」に住んでいると描かれていることから、横路（2013）は陳先生の持つ「記号性—近代的な教育機関で教育する教師—に合致<sup>69</sup>」していると指摘している。

当初、田中夫婦の出現に戸惑っていた陳先生だが、後に夫妻と関わっていくうちに夫婦仲の良さを好ましいものとして受け入れるようになっていく。田中夫妻が実子でも養子でもない健民に対して我が子のように—後に我が子そのものとして、愛情深く接する姿に内省し、感動するのである。さらに台湾の生活や習慣に嫌味なく馴染み、現地人の他人の子に対して愛情を持ったことを驚異に感じている。そしてついには最初の不信感を払拭し、「田中夫人のやうな内地婦人を見たことがないし、田中氏のような内地人にも接したことがなかつた<sup>70</sup>」とまで言わしめた。陳先生の持つ「記号性」を鑑みるに、日本支配のおかげで近代化した台湾において、その恩恵を被った人物が日本人に対して並々ならぬ好意を抱く構図は、日本側が望んだ幻想を理解し、巧みに利用している。

陳先生は最後には「突嗟私は田中夫妻のためなら李夫妻との間を駆け廻つて微力を尽すことを辞さない」と心に決めた<sup>71</sup>と独白する。陳先生を近代化した台湾として置き換え、田中夫妻を支配者としての日本として見るのは不自然なことでないだろう。作品が発表された1942年の年始めには帝国日本は、マニラやシンガポール、ジャワへの占領を遂げ、戦争は激化していた。そのような情勢の中で、既に統治から50年近く経過していた台湾（陳先生）が日本（田中夫妻）のために尽力することを厭わないという言説が、湾人作家である呂赫若から発信されることは、支配下に置かれた国が理想的な従順さを遂げた成功例としてのメタファーを一見して描き出している。

しかしながら、実態は異なる。呂赫若が描いた日本と台湾の関係性は田中夫妻と健民の関係にも暗示されていることを一考しなければならないだろう。物語の終盤、田中夫妻の夫の仕事の都合で町を離れ、台北へと再び引っ越すこととなる。そして健民を連れて田中夫妻が汽車へ乗り込み、李夫妻と陳先生との別れの場面で話が終わる。

「民坊はもう正式に田中さんにやつたんですか。」

と、私は呆然に立つてゐる李培元氏<sup>72</sup>に訊ねた。李氏は目を汽車から放さずに答へた。

「まだです。」

眼をむけると、汽車は市街の建物のかげに姿を消して見えなくなった。<sup>73</sup>

養子縁組をしないまま田中夫妻は健民を引っ越しに伴い、連れ去ってしまう。横路（2013）はこの終わり方に対し、台湾が統治され、日本に順化していったとしても決して「台湾」としての血縁を放棄したわけではないとして、次のように論じている。

作者呂赫若は、民坊の生みの親との関係が決して途切れたものではない、生みの親は民坊を手放したわけではない、ということはこの物語の最後に据えているのである。そこには、台湾が日本によって統治され、本来の血縁関係を忘れていってしまうかのようなのであるが、一方ではその血縁関係を忘れない人々がいるという思いが込められているのではないだろうか。（中略）メタ

<sup>68</sup> 本文では「ごみごみ」の二回目は繰り返し記号。

<sup>69</sup> 横路啓子『抵抗のメタファー 植民地台湾戦争期の文学』（東洋思想研究所、2013）、p.55。

<sup>70</sup> 中島利郎編『呂赫若：日本統治期台湾文学台湾人作家作品集 第二巻』（緑陰書房、1999）、p.211。

<sup>71</sup> 同上、p.212。

<sup>72</sup> 李培元は李夫妻の夫の名前。

<sup>73</sup> 中島利郎編『呂赫若：日本統治期台湾文学台湾人作家作品集 第二巻』（緑陰書房、1999）、p.213。

ファーを読み解くカギを持てば、親子の離別の物語とはまったく違う層の物語が見えてくるのである。<sup>74</sup>

ここで述べられている「本来の血縁関係」を客家、閩南、中国大陸、台湾……等、どのように捉えるかについて言及していない。ここに描き出されているのは、「内地-外地」の関係であって、エスニック・グループに言及はしていない。被支配者であった呂は外地風の洋服を着せられた民坊を「台湾」と意識したのではないだろうか。これらのことから、陳先生の盲目的とも言える田中夫妻に対する肯定的態度が、単に迎合していただけでないことが分かる。呂赫若が陳先生に語らせた、外地人としてのメタファーは次の一文にも表出されている。

では民坊はもう正式に田中氏の子供として入籍したのかと訊いてみると、さうではなかつた。すれば、本島人式にいふと、田中夫妻は結局他人の子供のために金銭を見ずに流してゐた理なのだ。<sup>75</sup>

病気になった健民に対して、惜しめない金銭を費やす夫妻を「本島人式に」言って「他人の子供」と評している。相対して「内地人式に」言えば「自分の子供」となる。ここでは未だ「台湾」であることを捨てず、しかしながらその中で日本を受け入れなければならない、台湾にとっての苦悩を冷静な視点から描き出していると言える。

### (3) 原住民族と外地人との境界の揺らぎ

「味方蕃」「熟蕃」と「敵蕃」に分かれたように、日本の統治に原住民族たちの中で葛藤が見られたことは確かであろう。台湾議會設置請願運動は「台湾」の自治を求める運動であった。対して霧社事件は日本の支配・統治に反抗した一種の民族自決である。戴國輝(1981)によるとセデック族の起草<sup>76</sup>による犠牲者は誤殺(漢族系台湾人大人1人、子供1人<sup>77</sup>)を除けば日本人のみ留まっておろ、「『内地人(日本人)ハ幼時(兒)ト雖モ許スナ、本島人(漢族系台湾人)ハ殺スナ』と口々に叫<sup>78</sup>」んでいたという。

さらに日本人関係者の官公舎に対しては一つ残らず放火襲撃を加えたにも関わらず、漢民族系の住民の商店・家屋に対しては放火しない等の配慮を示した。両グループの個人や集団に、蜂起に関しての連絡や申し合わせといった資料は今のところ発見されていないことから、何らかの取り決めが両者の間にはなかったと考えられている<sup>79</sup>。霧社事件に関して、そのエスニックはあくまでもセデック族に留まるのみであったかもしれないが、そこには「われわれの地」を守るという他者性を浮き彫りにする反抗であっただろう。攻撃対象から外地人を外したうえで、「われわれ」から内地人を排除しようと動いたことから、原住民族側からの外地人に対する境界に揺らぎを見せていたと言えるだろう。

また外地人側の境界に関しては台湾議會設置請願運動を例にして考える。台湾議會設置請願運動は植民地化での民族自治を目指すような性格ゆえに、その揺らぎを生んだとも言える。同運動の性格を若林(1987)は次のように述べている。

<sup>74</sup> 横路啓子『抵抗のメタファー 植民地台湾戦争期の文学』(東洋思想研究所、2013)、p.58。

<sup>75</sup> 中島利郎編『呂赫若：日本統治期台湾文学台湾人作家作品集 第二巻』(緑陰書房、1999)、p.211。

<sup>76</sup> 他部族への首狩り行為のこと。

<sup>77</sup> 日本人は134名が殺害された。台湾人の大人は流れ弾に被弾、子供は和服を着ていたために誤殺された。

<sup>78</sup> 戴國輝「霧社蜂起と中国革命—漢族系中国人の内なる少数民族問題—」『台湾霧社蜂起事件：研究と資料』(社会思想社、1981)、p.20。

<sup>79</sup> 同上、pp.19-20、pp.202-203。

台湾土着漢族地主資産階級<sup>80</sup>を主たる支持基盤とし、主にこの階級の出身である、日本教育を受けた（東京留学あるいは台湾内師範教育ないし医学教育）知識人を推進者とし、彼らの民族的政治的自覚に基づく植民地自治への志向を潜在させた、植民地政治への参政権要求運動であり、1915年の台湾同化会に始まる近代政治運動社会運動の形態をとった後期台湾抗日民族運動の重要な一環をなすものであった。<sup>81</sup>

同じ日本統治下にあった朝鮮では「3・1独立運動」が起こり、その性格は植民地自治を促すものではなく「独立」を志向したものであった。朝鮮人から参政権の付与を求める請願は行われていたものの、それらは朝鮮議会を求めるものではなく、衆議院選挙法の朝鮮施行を求めるものであった。それに比べれば台湾の例は、「近代日本政治史において植民地住民の民族的自覚に基づく政治要求が彼ら自身によって帝国議会にもちこまれた稀有の例<sup>82</sup>」であった。同運動が「民族的自覚」を促したことで、抗日民族運動となるに至った。蔣渭水は「台湾議會ノ請願ノ出現セシト同時ニ台湾人ノ人格ガ生レタリ<sup>83</sup>」と述べた。さらに在台日本人ジャーナリストであった柴田廉（1923）が台湾人青年の言葉を引いて「或る青年は、自分等は今や退いて純支那人たる能はず、進んで純日本人たる能はず、まさに其の中間にふら附いて居る<sup>84</sup>」と論じた。これに対し、若林（1983）は柴田が「同化」の絶好機として「植民者的なパターンナリスティックな眼<sup>85</sup>」でこの危機の性格を見誤っていると指摘する。これは被植民者たちの「精神の強調・葛藤の解決としての民族的自覚をも準備するもの」であり、換言して「実践的な思考の準拠枠としての、『台湾』および『台湾人』の発見であった」のである<sup>86</sup>。しかしながらこれらは、当然のように漢族の知識人グループによる言説であったため、「台湾人」と言ったときに指すものは漢族グループに過ぎなかった。

臺灣議會ハ臺灣ニ在住セル日本人タルト臺灣人タルト將タ行政区域内ニ在ル熟蕃人タルトヲ問ハス、均シク抗戰シタル代表者ヲ以テ組織シ、之ニ台湾特殊ノ事情ニ基ク法規及ヒ臺灣ニ於ケル豫算ノ議決権を附與スル特別代議機關ナリ。（傍点ママ）<sup>87</sup>

林献堂を始めとする台湾議會設置請願運動を行っていたのは漢族の知識人グループであった。「台湾」の自治を求めた彼らの視点に立った時ですら、台湾議会は日本人、台湾人、熟蕃人に留まるのみであり、生蕃と呼ばれる人々は埒外に置かれていた。「台湾人」の条件に原住民族は含まれていなかったのである。それが意識されるようになったのは、奇しくも霧社事件が契機であった。

台湾民衆党や台湾共産党の人々が、事件を知って蕃政策や警察政治を批判し、改善・改革を訴えた。当然、日本の統治への批判から独立や自治を求める言説へと繋げる意図もあっただろうが、「台湾」に原住民族が意識される大きな契機となったのは確かだろう。この意識こそが、漢民族グループ側の境界の揺らぎと言える。この揺らぎに、現代に通ずる「台湾」の輪郭を読み取ることができる。しかしながら、1987年の日中戦争の勃発に伴い、皇民化が始まったことで「本国政治から立憲主義が後退していく中で、1930年代前半のうちに逼塞せしめられ<sup>88</sup>」た。それゆえ、両者の境界の揺らぎは皇民化

<sup>80</sup> 若林は「日本権力による台湾漢族支配の政治的・社会的・経済的媒介者の役割を受け持たされた漢族社会の上層部分（地主・資産家等）」を指して土着地主資産階級と称し、「清末までに形成されていた伊自由漢族社会の上層階級が、日本帝国主義による植民地支配の確立の家庭—台湾社会の、日本権力・資本による上からの強硬的植民地的近代化の基礎的諸課程—を経て、変形されて形成されたもの」であるとしている。（若林正文『台湾抗日運動史研究』（研文出版、1983）、p.35。）

<sup>81</sup> 若林正文『台湾抗日運動史研究』（研文出版、1983）、p.20。

<sup>82</sup> 同上、同頁。

<sup>83</sup> 蔣渭水『臺灣人ノ臺灣議會設置運動ト其思想』（中央研究院臺灣史研究所所有、1922）、p.25。

<sup>84</sup> 柴田廉『台湾同化政策論』（見文館、1923）、pp.50-51。

<sup>85</sup> 若林正文『台湾抗日運動史研究』（研文出版、1983）、p.199。

<sup>86</sup> 同上、p.200。

<sup>87</sup> 臺灣議會期成同盟會『臺灣議會設置請願理由書 大正十五年二月』（臺灣議會期成同盟會、1926）、p.12。

<sup>88</sup> 若林正文『台湾抗日運動史研究』（研文出版、1983）、p.8。

の波にのまれ、その後の展開を見せることはなかった。

台湾ナショナル・アイデンティティの走りである「新台湾人意識」は、2・28事件を契機として、以来1980年代に至るまで存在した本省人と外省人との境界を越境する概念として李登輝によって提唱された。このような言説によって、本省人と外省人という対立を越境する試みには「われわれ」というネイションが存在する。「新台湾人意識」は本省人、外省人、原住民族、混血等々、台湾という島に住む人々を包括して「われわれ=台湾人」と規定したものである。この「われわれ」が「台湾」を意識したとき、そこに台湾ナショナリズムが形成・展開される。

これらをまとめると、図2のとおりになる。左図は日本統治時代、中央図は光復後の国民党軍政期、右図は民主化後の現在の台湾を、それぞれ示している。日本統治時代には図1で既述したとおり、従来の二項対立に加え、内地からのまなざし、外地内部でのエスニック・グループのまなざしが存在した。

台湾光復後は「外省人-本省人」という対立構造があったものの、本省人たちは「われわれ」として「中華民国」ではなく、「台湾」を意識していた。国共内戦の敗戦によって、外省人が大陸から切り離された以上、この対立構造が崩壊し、混在していった末に右図のように「われわれ=台湾人」になることは明らかである。本研究においては左図の構造に焦点を当て論じたため、中央図及び右図の成立過程を紙幅の都合上、詳述することが出来なかったが、当然その一体化するネイションの過程で、多くの艱難辛苦があったことは言い添えておく。

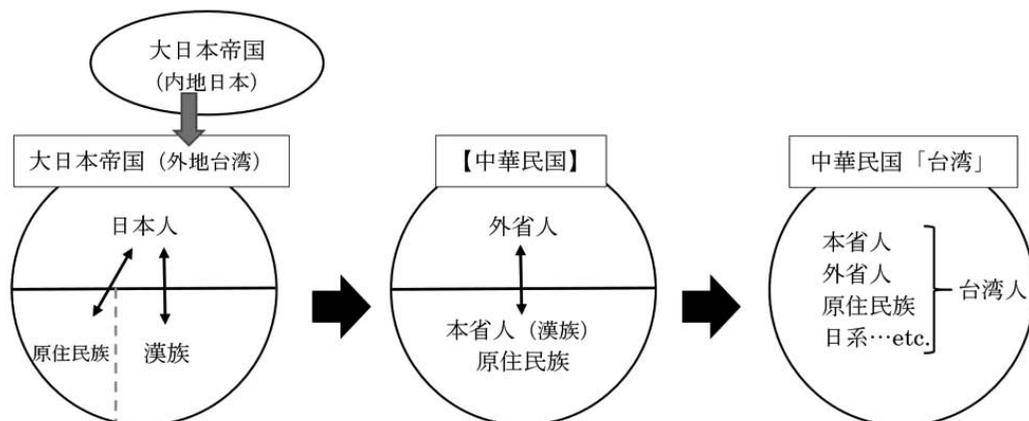


図2：台湾ナショナル・アイデンティティ形成の変遷図（筆者作成）

## 結論

本研究では内地人が外地台湾をどのようにまなざしていたか。外地人たちが日本帝国の家族国家観による統治をどのように受容していたかの2点を文学作品から明らかにしたうえで、「台湾」というナショナル・アイデンティティが日本統治時代にどのように萌芽したかについて明らかにした。

日本人作家の川合三良と台湾人作家の呂赫若の文学作品をテキストとして取り上げ、それぞれの立場からどのように台湾及び日本をまなざしていたのかについて論じた。従来の日本人が台湾人を差別していたという視座とは別に、「台湾」という土地自体への差別から日本人が台湾に住む日本人への差別意識を持っており、そこには確かに支配者としての優越感を抱いていたことが読み取れた。

また、日本人という支配者が存在したことで、それまで互いの境界線を侵すことなく共存していた漢族グループと原住民族が互いを意識することとなった。両者の境界に揺らぎが生じたことで、「われわれ」の意識が双方に発生した。「中華民国」の圧政と同化政策によってさらにその境界は薄らぎ、共生への道を模索し始めることとなった。「山地同胞」呼称された原住民族たちは、民族自決を訴えた結果「原住民」と自らを称する権利を得て、多民族集団の一民族としての地位を確立していった。

台湾のナショナル・アイデンティティの走りである「新台湾人意識」は、2・28事件を契機として、以来1980年代に至るまで存在した本省人と外省人との境界を越境する概念として李登輝によって提

唱された。李登輝は「本日、この土地で共に成長し、生きてきたわれわれは、原住民族はもちろん、数百年前あるいは数十年前に来たかを問わず、すべてが台湾人であり、同時にすべてが台湾の真の主人であります」と光復53周年記念談話で述べた。このような言説によって、本省人と外省人という対立を越境する試みには「われわれ」というネイションが存在する。「新台湾人意識」は本省人、外省人、原住民族、混血等々、台湾という島に住む人々を包括して「われわれ=台湾人」と規定したものである。これは現在「台湾人」との自己認識の高さを鑑みるに、「台湾」に住む人々に受け入れられた概念であると言えよう。この「われわれ」が「台湾」を意識したとき、そこに台湾ナショナリズムが形成・展開される。台湾光復後は「外省人-本省人」という対立構造があったものの、本省人たちは確かに「われわれ」を意識していた。外省人が大陸から切り離された以上、この対立構造が崩壊し、混在していた末に「われわれ」になることは明らかである。しかしながら現在の「われわれ=台湾」に至るまでは、様々な境界の越境による苦難があったことを言い添えておく。

このような「われわれ」の意識変遷を辿れば、その萌芽が見られるのは日本植民地時代であった。日本帝国が統治を開始した時点から、外地台湾の中では「支配者-被支配者」の対立構造が描かれる。単純化された従来の二項対立は「日本人-漢族・原住民族」という構造形態である。しかしこのときに図2の左図のように、二項対立軸の下部には外地人と原住民族があり、両者の間には境界が存在した。日本統治初期には「日本人-漢族グループ」「日本人-原住民族」というそれぞれの対立構造を描くのみであり、左図の外地人と原住民族の間には点線で示したように、境界が存在した。両者は境界を越境することなく、互いへの視座が僅かに顕在化したのは霧社事件であった。

特に、外地人たちにおいて日本に同化しようとした人々ですら、生蕃と呼ばれた原住民族を疎外するような動きを見せていたのは、台湾議会設置請願理由書の台湾人の要件に含まれなかった事実からも如実に現れている。また川合三良の『轉校』に表れているように、対立構造は決して二項に収まるものではなく、同じ日本人同士ですら図1の左図のように内地から外地への差別意識構造を描き出し、「内地（日本人）-外地（日本人・湾生）」という枠組みを生み出していた。このような複雑な構造を描く中で、外地人たちが原住民族たちを意識し、「われわれ」に組み込もうとした動きを見せたのは、奇しくも霧社事件が契機であった。しかしながら、日本統治は半世紀で収束し、「外地人/原住民族」の境界は揺らぎを見せたものの、「台湾人」としてのネイション意識なのか、またはエスニック・グループとしての意識なのかを明確にするまでには及ばず、その萌芽に留まったのである。

## 参考文献

### 日本語文献

- 阿部潔『彷徨えるナショナリズム』（世界思想社、2001）  
大江志乃夫[ほか]編『岩波講座近代日本と植民地 帝国統治の構造』（岩波書店、1992）  
岡本真希子『植民地官僚の政治史』（三元社、2008）  
小熊英二『単一民族神話の起源 〈日本人〉の自画像の系譜』（新曜社、1995）  
尾崎秀樹『近代文学の傷痕：旧植民地文学論』（岩波書店、1991）  
河原功『台湾文学研究への道』（村里社、2011）  
木村一信『「外地」日本語文学への射程』（双文社出版、2014）  
黒川創編『〈外地〉の日本語文学選 南方・南洋/台湾』（新宿書房、1996）  
酒井哲哉責任編集『岩波講座「帝国」日本の学知（1）「帝国」編成の系譜』（岩波書店、2006）  
柴田廉『台湾同化政策論』（晃文館、1923）  
蔣渭水『臺灣人ノ臺灣議會設置運動ト其思想』（中央研究院臺灣史研究所所有、1922）  
関正昭『日本語教育史研究序説』（スリーエーネットワーク、1997）  
戴國輝「霧社蜂起と中国革命—漢族系中国人の内なる少数民族問題—」『台湾霧社蜂起事件：研究と資料』（社会思想社、1981）  
臺灣議會期成同盟會『臺灣議會設置請願理由書 大正十五年二月』（臺灣議會期成同盟會、1926）  
所功『日本の国旗・国歌—「日の丸・君が代」の歴史と異義—』（國民會館、1995）

- 中川浩一、和歌森民男 編『霧社事件：台湾高砂族の蜂起』（三省堂、1980）
- 中島利郎、河原功 編『日本統治期台湾文学日本人作家作品集』第二巻、第五巻（緑蔭書房、1998、1999）
- 中谷猛、川上勉、高橋秀寿 編『ナショナル・アイデンティティ論の現在—現代世界を読み解くために—』（晃洋書房、2003）
- 西川満 編・河原功 監修『台湾文学集 日本植民地文学精選集013〔台湾編〕1』（ゆまに書房、2000）
- 日本語教育学会編；水谷修〔ほか〕編集『新版 日本語教育事典』（大修館書店、2005）
- 楢山幸夫『台湾植民地史の研究』（ゆまに書房、2015）
- 藤井省三『台湾文学この百年』（東方書店、1998）
- 藤井省三、黄英哲、垂水千恵 編『台湾の「大東亜戦争」：文学・メディア・文化』（東京大学出版会、2002）
- 松永正義『台湾文学のおもしろさ』（研文出版、2006）
- 向山寛夫『日本統治下における台湾民族運動史』（中央経済研究所、1987）
- 山口守 編、藤井省三〔ほか〕著『講座 台湾文学』（国書刊行会、2003）
- 山崎直哉『戦後台湾教育とナショナル・アイデンティティ』（東信堂、2009）
- 横路啓子『抵抗のメタファー 植民地台湾戦争期の文学』（東洋思想研究所、2013）
- 李登輝『台湾の主張』（PHP 研究所、1999）
- 臨時臺灣舊慣調査會第一部 編『蕃族調査報告書』（臺灣總督府蕃族調査會、1913-1921）
- 臨時臺灣舊慣調査會第一部 編『蕃族慣習調査報告書』（臺灣總督府蕃族調査會、1913-1921）
- 若林敬子『沖縄の人口問題と社会的現実』（東信堂、2009）
- 若林正文『台湾抗日運動史研究』（研文出版、1983）
- 日本語論文
- 川原絵梨奈「『新台湾人』の議論と政治意識をめぐって」『アジア社会文化研究 (10)』（アジア社会文化研究会、2009）
- 川原絵梨奈「『台湾人』意識の成立をめぐって」『アジア社会文化研究 (12), 97-105, 2011-03』（アジア社会文化研究会、2011）
- 黄嘉琪「日本統治時代における『内台共婚』の構造と展開」『比較家族史研究 (27), 129-130』（比較家族史学会、2012）
- 黄振原「浜田隼雄『南方移民村』論」『論究日本文学 (63), 22-32』（立命館大学日文学会、1996）
- 小金丸貴志「日本統治初期の台湾における刑法適用問題—依用慣行の起源と総督府・法院の対立」『日本台湾学会報 (13), 1-24』（台湾学会、2011）
- 垂水千恵「日本時代の台湾文壇と大政翼賛運動に関する一考察」『横浜国立大学留学生センター紀要 (2), 102-110』（横浜国立大学、1995）
- 唐瓊瑜「『二世』から見る、戦前における台湾文学」『第21回国際日本文学研究学会会議録 (21), 55-68』（国文学研究資料館、1998）
- 中島利郎「日本統治期台湾文学研究：台湾における川合三良—静謐なる抵抗—」『岐阜聖徳学園大学紀要 外国語学部編 (51), 61-84』（淑徳大学、2012）
- 中谷猛「『ナショナル・アイデンティティ』の概念に関する問題整理」『立命館法學 2000年 3・4号 (271・272号) 下巻』（立命館大学法学会、2001）
- 樋口靖「領台初期の台湾語教学 (一)」『文学部紀要 25 (2), 23-40』（文教大学、2012）
- 松尾教史「台湾時代における川合三良の文学作品：ある在台内地人作家にとっての皇民化政策」『Core ethics (5), 305-314』（立命館大学、2009）
- 八藤後忠夫・水谷徹「障害者の生存権と優生思想—障害児教育への示唆と展望—」『教育学部紀要 (39), 79-86』（文教大学、2005）
- 若林正文「名前の苦しみとナショナル・アイデンティティ—『中華民国は台湾です、中国ではありません』—」『學士會會報 第918号』（学士会、2016）

## 外国語文献

- アントニー・D・スミス：高柳訳『ナショナリズムの生命力』（晶文社、1998）  
フェイ・阮・クリーマン；林ゆう子 訳『大日本帝国のクレオール 〈植民地期台湾の日本語文学〉』（慶應義塾大学出版会、2007）  
黄俊傑；白井進 訳『台湾意識と台湾文化—台湾におけるアイデンティティの歴史的変遷』（東方書店、2008）  
林莉菁『我的青春 我的 FORMOSA』（無限出版、2012）  
漆高儒『蔣経国評伝—我是台湾人』（正中書局、1997年）  
台北市西部文化局『台北二二八記念館の常設展示特集』（台北市政府文化局、2011）  
ウィル・キムリッカ；角田猛之、石山文彦、山崎康仕 監訳『多文化時代の市民権：マイノリティの権利と自由主義』（晃洋書房、1998）

## 外国語論文

- 林央敏 著・樋口靖 訳「台湾文学運動試論」『文学部紀要12（2）, 133-154』（文教大学、1991）  
丘其謙『臺灣土著族の名制』（國立臺灣大學考古人類學研究所碩士論文、未出版）  
柴峰「新文学・新劇運動人名録」『台北文物第二卷第三期』（台北市文献委員会、1954）  
王雅萍『姓名與認同：以台灣原住民族姓名議題為中心』（國立政治大学民族研究所碩士論文、未出版）  
王雅萍「各族郡傳統命名制度」『臺灣原住民族郡傳統命名制度的探討』（臺灣原住民族行政局、1994）  
楊昇展『臺灣原住民族傳統姓名之研究』（國立臺南大学台湾文化研究所教學碩士班碩士論文、未出版、2004）  
張良澤「台湾文学の近況—『寒夜三部曲』を中心として」『中国研究月報（442）, 1-11』（一般社団法人中国研究所、1984）

## 新聞・雑誌

- 朝日新聞「台湾、日本への対応苦心 中国意識、大規模軍事パレード」2015年7月5日付朝刊  
朝日新聞「抗日戦70年、割れる台湾」2015年8月14日付朝刊  
朝日新聞「中華民国旗が示すもの」2016年1月22日付朝刊  
朝日新聞デジタル『震災後の義援金、米と台湾が最多 最貧国30カ国からも』2013年4月4日付  
<http://www.asahi.com/special/news/articles/TKY201304020473.html>  
週刊朝日「迫る、台湾総統選！ それでも国民党・馬英九が敗北する『現実味』」2008年3月28日刊行

## 国内デジタル資料・URL

- 国立公文書館デジタルアーカイブ「国民優生法ヲ定ム」『公文類聚・第六十四編・昭和十五年・第百十八卷・衛生・人類衛生・獸畜衛生』  
<https://www.digital.archives.go.jp/das/image/M0000000000001769772>  
日本台湾交流協会 HP『第五回台湾における対日世論調査（2015年度）』概要版 [https://www.koryu.or.jp/taipei/ez\\_3\\_contents.nsf/04/B9736DAE28A0FC5749257FF4002CA457/\\$FILE/2015seron\\_kani\\_JP.pdf](https://www.koryu.or.jp/taipei/ez_3_contents.nsf/04/B9736DAE28A0FC5749257FF4002CA457/$FILE/2015seron_kani_JP.pdf)  
日本赤十字社 HP [http://www.jrc.or.jp/contribution/140305\\_000535.html](http://www.jrc.or.jp/contribution/140305_000535.html)

## 国外デジタル資料・URL

- 内政部戸政司全球資訊網『民國106年10月戸口統計資料分析』  
[http://www.ris.gov.tw/latestmessage/-/asset\\_publisher/i42D/content/民國106年10月戸口統計資料分析](http://www.ris.gov.tw/latestmessage/-/asset_publisher/i42D/content/民國106年10月戸口統計資料分析)  
屏東縣選舉委員會編印「第十二任總統、副總統選舉及全國性公民投票第五案、第六案選舉實錄」中華民國97年  
[http://www.cec.gov.tw/old\\_upload/14/1014/attach/9/970322.pdf](http://www.cec.gov.tw/old_upload/14/1014/attach/9/970322.pdf)  
司法院大法官 HP

[http://www.judicial.gov.tw/constitutionalcourt/p07\\_2.asp?lawno=45](http://www.judicial.gov.tw/constitutionalcourt/p07_2.asp?lawno=45)

台北市 HP 「氏族與命名『布農族』」

<http://tcgwww.taipei.gov.tw/fp.asp?fpage=cp&xItem=1001480&CtNode=16941&mp=cb01>

臺灣民眾臺灣人 / 中國人認同趨勢分佈 (1992年06月～2016年12月)

<http://esc.nccu.edu.tw/app/news.php?Sn=166#>

臺灣民眾統獨立場趨勢分佈 (1994年12月～2016年12月)

<http://esc.nccu.edu.tw/course/news.php?Sn=167#>

台湾国防部公式アカウント：国防部發言人「國防部特於『國防戰力展示』正式活動時機，開放200位名額供粉絲報名參訪」

[https://www.facebook.com/pg/MilitarySpokesman/photos/?tab=album&album\\_id=933763033353682](https://www.facebook.com/pg/MilitarySpokesman/photos/?tab=album&album_id=933763033353682)

台湾原住民數位博物館 HP 「阿美族」 <http://www.dmtip.gov.tw/Bg/Amis.htm>

行政院 HP 「中華民國 國情簡介」

[http://www.ey.gov.tw/state/News\\_Content.aspx?n=6C2B8374CBFF550E&s=C51A4E4E81A0BBEA](http://www.ey.gov.tw/state/News_Content.aspx?n=6C2B8374CBFF550E&s=C51A4E4E81A0BBEA)

朱立倫 Facebook 公式アカウント「對於一個16歲的年輕人，這樣太殘忍了。周子瑜，歡迎回家！（2016年1月16日投稿）」

<https://www.facebook.com/lchu/posts/10156539664515128>

中華奧林匹克委員會 HP 「2017年第8屆札幌亞洲冬季運動會授旗典禮」

<http://www.tpenoc.net/?p=8405>

中華民國國防部 HP 軍事新聞「國軍7月4日湖口『國防戰力展示』弘揚抗戰精神」2015年4月15日付 <https://www.mnd.gov.tw/>